第25回

胃癌の未病、ピロリ菌感染

Text by 福生吉裕

未病ケアで健やかに

わかるでしょう

「半年前から胃が重くて時々むかむかするのです。主人がピロリ菌がいるのですって。私もうつったのかと思います。」

62歳になる中山智恵子（仮名）さんは心配そうにそう言ってクリニックを訪れました。ご主人が人間ドック検査でピロリ菌を指摘されたようです。

「うつった、とは？」「夫婦ですので……そういう。同じモノを食べてますので。先生、わかるでしょう」

疑い深い目で見られました。

昭和30年の分かれ道

実はこのピロリ菌、感染源はよくわかっていないのです。中山さんは少し一方的に考えすぎかもしれません。疫学調査では昭和30年より以前に生まれた方は約80%の方が感染しているという報告があります。30年以降に生まれた方はずーと感染率は下がってきます。そう、戦後の衛生状態と深い関わりがあるのです。また、幼児の時の胃酸はそう強くはないのでこの時期に感染しているとの報告もあります。中山さんの場合、ご主人からよりも結婚以前にすでに感染していた可能性が高いことを話し、とりあえず中山さんには胃内視鏡の検査をしてもらうことになりました。

自己防御システムに発癌性があった

5~8本のしっぽを持ち、それをくるくる回して泳ぎ、しかも強酸の胃の中に住んでいるヘリコバクター・ピロリ菌。発見以来約30年がたち、その間のたゆまぬ調査の結果、胃癌の98%に関与することがわかって来ました。ピロリ菌の特徴は「ウレアーゼ」という酵素を出すことで胃の中の尿素を分解しアンモニアと二酸化炭素を生成という特殊技能を獲得しているからです。このアンモニアがアルカリ性であるため自分の周りは酸度が薄まり、あの強酸の中でもピロリ菌は生き残る事が出来るのです。しかしこのアンモニアが人の胃にとっては有害になるのです。招かれざる侵入者と断定出来ます。やはり除菌するのがおすすめです。

治し方も進化した

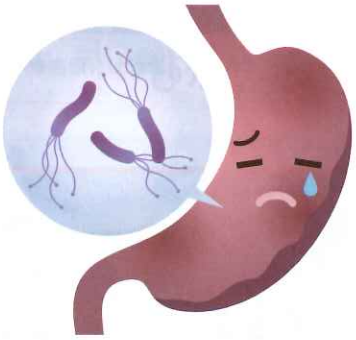
内視鏡検査の結果、どうやら中山さんはピロリ菌陽性でした。さすがにもう感染源の追及はされずに、あっさりと認め、除菌を希望されました。医療界では肺炎や結核の場合ですと「殺菌」という言葉ですがピロリ菌の場合は「除菌」という言葉が使われます。“虫下し”的感覚なのです。

治療は飲みやすいようにパックになっているのがあります。1日朝夕2回それぞれ3粒ずつ7日間飲みます。胃酸抑制剤と抗生物質が入っております。薬という感覚ではなくサプリメントのようで非常にコンビニエントになっております。これでも合う人合わない人もいられます。副作用としては少数ですが、下痢、発しんなどが出ますので飲む前には主治医に相談して下さい。

ピロリ菌が息をするのですか

治療後1カ月たったら、本当に除菌されたかどうかのチェックが必要です。2割ぐらいの方がなかなか除菌できないからです。

そのチェック法が「尿素呼気試験法」です。患者さんの吐く息をバッグに集めて調べます。ピロリ菌が息をするのではありません。検査薬（尿素）を飲むとピロリ菌がいればアンモニアと同時に二酸化炭素を出します。このバッグに入った微かな二酸化炭素の量で除去できたかどうかがわかるのです。「すごいですね」と中山さん。ラポールな関係になった瞬間でした。



※ラポール　患者と医師の間に生まれた信頼関係

ふくお・よしひろ（一財）博慈会老人病研究所所長。少子高齢社会における未病ケアシステムの構築を提唱している。21世紀医療課題委員会代表。著書に『臨床判断ハンドブック』『見た目で病気がわかる』『未病息災』『セルフ・メディカ』など。